

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32620

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10281

研究課題名(和文)骨転移に放射線治療を受けるがん患者の至適生活を支援する看護プログラムの洗練

研究課題名(英文)Refinement of a nursing program to support optimal living for cancer patients undergoing radiotherapy for bone metastases

研究代表者

高山 京子(Takayama, Kyoko)

順天堂大学・医療看護学部・准教授

研究者番号：30461172

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、先行研究で開発した「骨転移に放射線治療を受けるがん患者の至適生活を支援する看護プログラム」の洗練を図ることである。骨転移患者に関わる看護師10名にプログラム内容を開示し、臨床現場で外来看護師が活用する際の課題や療養支援上の困難感についてインタビューを行った。得られたデータから見出した課題を基に、プログラムの介入方法や介入時間の短縮に向けた修正を行った。また、患者への具体的な関わりの例示を含めた外来看護師向けのガイドや、患者に痛みが増強しない体の動かし方をわかりやすく説明するための動画も作成し、介入研究の実施に向けた準備を整えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、骨転移による痛みがあるがん患者に対して、症状マネジメントを行い生活行動を工夫することによって患者が満足した生活に近づけるように支援する看護プログラムを、外来看護師の意見を取り入れて修正した。今後、この看護プログラムを臨床で外来看護師が骨転移患者に適用し効果を検証することで、患者のQOL向上および外来看護に貢献できると考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to refine the "nursing program to support optimal living for cancer patients undergoing radiotherapy for bone metastases" developed in a previous study. The program content was disclosed to 10 nurses involved in patients with bone metastases, and they were interviewed about the difficulties in supporting their care when utilized by outpatient nurses in the clinical setting. Based on the difficulties found from the obtained data, we modified the program intervention method and shortened the intervention time. In addition, a guide for outpatient nurses that included examples of specific interventions for patients and a video to explain to patients in an easy-to-understand manner how to move their bodies without increasing pain were prepared for the implementation of the intervention study.

研究分野：がん看護

キーワード：骨転移 がん看護 生活支援 放射線治療 看護介入プログラム 疼痛

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

がんの骨への転移は、あらゆるがん腫において病状の進行過程で発見される。近年は、画像診断の発達により骨転移を早期に同定することができ、またがん治療法の向上によって骨転移患者の生存期間が延長している。その結果、骨転移を有する患者は益々増加している。平成 28 年の改正がん対策基本法では、がん患者の療養生活の質の維持向上をより一層強化することが示されている。骨転移患者が増加している現在、患者が骨転移による痛みを緩和し脆弱な骨の病的骨折を防ぎながらも、充実した療養生活を送れるような支援が求められている。骨転移患者のもっとも苦痛な症状は、痛みである。国外での先行研究では、骨転移患者の痛みに対する疼痛マネジメントの教育的介入によって、痛みが低下することは明らかにされたが、QOL の改善効果については得られていない。

そこで、骨転移患者が質の高い療養生活を送れるような看護プログラムの開発に取り組み、以下の看護プログラムを考案した。プログラムの目的は、「痛みを緩和したり脆弱な骨を保護するために可動性の制限が必要な状況であっても、患者が工夫したり前向きに行動することで身体的、心理社会的に満足した生活、すなわち至適生活を送ることができる」とした。対象は、痛みがあり骨転移に対して放射線治療を受けるがん患者とした。介入は、放射線治療開始前から治療終了 4 週間までに、患者の来院に合わせて個別に 4 回実施とした。その内容は、パンフレットと痛みの日誌を用いて、鎮痛薬の使用法や痛みの出現を防ぐ体の動かし方の提案とフィードバックによる疼痛マネジメント教育、可動性の制限に対する適切な受け止めの促進、生活行動を工夫してできることを増やす支援、情緒的支援とした。そして、そのプログラムを骨転移患者に適用しその効果を検証した結果、骨転移患者が痛みの緩和に自信をもって取り組み、可動性の制限がある中でも生活行動を工夫し拡大していたことから、開発したプログラムは、放射線治療を受ける骨転移患者に有効であることが示唆された。しかし、プログラムが放射線治療を受ける骨転移患者に広く適用されるためには、外来看護師が通常業務を行いながら外来の場で活用できるようなプログラムに洗練させる必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、開発した「骨転移に放射線治療を受けるがん患者の至適生活を支援する看護プログラム」の洗練を図ることである。そのために、(1) 開発した看護プログラムを臨床現場の外来看護師が活用する際の課題、(2) 骨転移患者に外来で療養支援を行う上での看護師の困難感、(3) 骨転移患者の看護に関する文献調査、(4) 骨転移患者への説明時に使用する「体の動かし方」動画の作成、(5) 看護プログラムの修正に取り組んだ。

3. 研究の方法

(1) 開発した看護プログラムを臨床現場の外来看護師が活用する際の課題

がん診療連携拠点病院で、外来で放射線治療を受ける患者に関わる外来看護師、外来で骨転移患者に関わる専門看護師や認定看護師を対象に、開発した看護プログラムの内容(作成経緯、プログラムの対象者、プログラムの構成要素、介入の期間・回数・時期、介入の目標と具体的内容、使用するツール)を開示した。その後、個別にインタビュー調査を行い、プログラムを骨転移患者の適用する場合に実施が難しいと感じることについて意見を求めた。得られたデータは、質的帰納的に分析した。

(2) 骨転移患者に外来で療養支援を行う上で抱く看護師の困難感

看護プログラムが外来看護師に活用されるための示唆を得るために、(1) の調査時に合わせて、インタビュー調査を行い、外来で骨転移患者に関わる中で対応が難しいと感じたことについて意見を求めた。得られたデータは、質的帰納的に分析した。

(3) 骨転移患者の看護に関する文献調査

国内の骨転移患者の看護に関する動向を明らかにするために、医学中央雑誌 WEB 版を用いて、過去 10 年間(2011~2021 年)の看護研究から抽出して内容を分析した。

(4) 骨転移患者への説明時に使用する「体の動かし方」動画の作成

(1) の調査結果から新たに課題として、外来看護師が骨転移患者に痛みの増強を防ぐ体の動かし方を説明するためのツールの必要性が示されたことから、動画の作成を行った。骨転移患者の生活場面を想定し、痛みの増強や病的骨折を防ぐ体の動かし方についてシナリオを作成した。また、場面ごとの注意点や実際の動作方法について骨転移患者のリハビリテーションに携わっている理学療法士に専門的立場から意見を求め、修正後に動画の撮影を行った。

(5) 看護プログラムの修正

(1)(2) の結果を基に、研究者間でプログラムの内容について検討して、プログラムの修

正を行った。

4. 研究成果

(1) 開発した看護プログラムを臨床現場の外来看護師が活用する際の課題

3つのがん診療連携拠点病院から、10名の協力が得られた。そのうち、3名ががん看護専門看護師、6名ががん看護関連の認定看護師、1名は資格なしであった。インタビューの結果から、主な課題とその対応策として、次のようなことが挙げられた。

介入の回数と時期：放射線治療前、治療終了時、治療終了2週間後、治療終了4週後の4回行うことと介入時期は妥当である。しかし、放射線治療終了後の患者への介入については、誰が実施するかが課題となった。そのため、放射線治療科の看護師が行うか診療科の看護師が行うかは施設のやりやすい方法で行うこと、特に治療終了後の介入が難しい場合は、対面に限定せず電話等の方法も可能とした。

介入時間：放射線治療前の介入は初回であるため時間を要するが、通常の業務を行いながらすべての内容を1回で終了することは難しい。そのため、治療前～照射3日目までの間で分割して行うこととした。

内容の充実：社会的支援についての具体的な内容を追加する。

支援内容のわかりやすさ：外来看護師が看護プログラムをすぐに活用できるように、特に可動性の制限に対する適切な受け止めの支援については、その表現をかみ砕いたり、患者に実際に語りかける言葉を例示するなどの工夫が必要な箇所があった。

外来看護師の疼痛マネジメントの知識の強化：看護プログラムを活用するためには、疼痛マネジメントの知識や、病的骨折および疼痛の増強を防ぐための体の動かし方の知識を得ておくことの必要性が挙げられた。対応策として、看護プログラムを適用する前に、外来看護師を対象とした講習会を開催すること、また患者にわかりやすく説明するためのツールとして、体の動かし方の動画を作成することとした。

(2) 骨転移患者に外来で療養支援を行う上で抱く看護師の困難感

(1)のインタビュー調査時に、外来で骨転移患者に関わる中で対応が難しいと感じたことについて尋ねて、質的帰納的に分析した。データ内容の異質性から1名を除き、がん看護専門看護師と認定看護師9名のデータでまとめた。臨床経験の平均年数は、19.2年であった。困難感の内容は、【骨転移患者に対する痛みの緩和や骨折を避ける支援は難しい】、【可動域や荷重をどこまでかけてよいかの判断ができない】、【骨転移の進行に伴って生じる療養生活上の問題や苦悩を外来で支え続けることが難しい】、【骨転移患者の情報共有や連携・相談できる場がない】、【忙しい外来業務の中で支援の時間を確保できない】の5つに集約された。これらの困難感には、

痛みの緩和と骨折を防ぐために患者の理解を得る難しさや、行動制限をかけることで患者の療養生活の質を落とさないように患者個別に配慮する難しさが含まれていた。そのため、外来看護師だけで対応するのではなく、骨転移患者に関わる専門職種間で、患者の骨転移部位に合わせた安静度や生活状況に関する情報共有、外来看護師が支援を行う上で他職種と相談や連携ができる体制づくりが必要と考えられた。

(3) 骨転移患者の看護に関する文献調査

対象となった文献は、26件であった。研究内容は、痛みのマネジメントや、骨転移がもたらす精神的な苦痛への支援、麻痺や骨折による日常生活支援などの看護実践、骨転移患者の生活上の困難やQOL、看護師の骨転移に関する知識や意識、多職種連携など多岐にわたっていた。研究方法は、事例研究が9件と最も多く、骨転移患者を対象とした介入研究はわずかであった。骨転移患者の痛みのマネジメントは、常に発表され続けていることから看護師にとって関心の高い課題と考えられた。

(4) 骨転移患者への説明時に使用する「体の動かし方」動画の作成

骨転移患者の生活場面の中で痛みを生じやすい場面として、「歩く」「ベッドから起き上がる」「イスから立ち上がる」や、複合的な動きとなる「台所で料理をする」など9場面を選定した。また、骨転移の特徴から9場面について、転移部位別に脊椎用と四肢長官用にそれぞれ作成した。1つの動画時間は、2分～3分程度と短くまとめた。また、患者に説明する際に、全ての動画をみるのではなく、患者個別に必要な場面を選択して視聴できるようにした。また、看護師が患者に説明する際に患者と一緒に注意点を確認できるように視覚でポイントを示し、患者が待ち時間に一人でみても学べるようにテロップでの説明も含めた。

(5) 看護プログラムの修正

(1)(2)の結果を基に、プログラムの内容を修正した。また、外来看護師がプログラムをすぐに活用できるように、介入の意図や患者への言葉がけの例示を含めた具体的な方法を記載した外来看護師向けのガイドも併せて作成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高山 京子, 大内 美穂子, 佐藤 まゆみ, 佐藤 禮子
2. 発表標題 骨転移を有する外来がん患者に療養支援を行う上で専門看護師・認定看護師が抱く困難感
3. 学会等名 第19回日本臨床腫瘍学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高山京子
2. 発表標題 骨転移を有するがん患者に関する看護研究の動向 - 過去10年間の文献から -
3. 学会等名 第7回日本がんサポーターブケア学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 まゆみ (Sato Mayumi) (10251191)	順天堂大学・大学院医療看護学研究科・教授 (32620)	
研究分担者	大内 美穂子 (Ouchi Mihoko) (30614507)	千葉県立保健医療大学・健康科学部・講師 (22501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	佐藤 禮子 (Sato Reiko) (90132240)	東京通信大学・人間福祉学部・名誉教授 (32826)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関